

かね

暁鐘の音

60

知識労働者

「二十世紀という世紀は、農業や工場、鉱山や輸送業において、物を作ったり動かしたりする肉体労働から、知識労働とサービス労働への移行が行われた世紀である。それは人類の歴史に残る移行だった。そしてそれは、われわれの働き方を変化させるものだった。」これはP・F・ドラッガーの「未来への決断」の中の一節である。

とくに後半の五十年は、コンピュータの出現によって、大きく労働の形態が変化した。コンピュータそのものに携わる知識労働者も、この間に単なる手作業の置き換えに貢献した時代から、大規模で複雑なシステムをコントロールする時代となった。そして、コンピュータの発達は、経済の体制をも変えた。国ごとの「国民経済」から、国の枠を越えた「グローバル経済」へと一気に変化させた。あまりの変化の早さに、世界中の「知識労働者」は、今、必死になつて新しい枠組みの構築に知恵を絞っているところである。



ところで「知識労働者」とは、どういう労働者なのだろう。この言葉も、実は四十年ほど前にドラッガー自身が始めて使ったものだそうである。ドラッガーは、そのとき今までは違ったタイプの労働者が生まれ



てきたことに気付いたのである。

十九世紀の終り頃から、家事労働者が工場へとその働く場を替えた。ドラッガーに言わせれば、「第一次大戦後に始まった住み込みの使用人たちの家事労働からの離脱は、統計学者さえ気付かなかった」という。それに続いて農民が工場に向かった。いわゆるブルーカラー労働者の出現である。こちらの場合は都市への人口流入などで社会問題となったが、生産性は農業よりも高く、その上労働そのものは農業よりも易しかったこともあって、彼等自身、移行に大きな障害はなかった。今でも東北地方などの農業労働者や漁業労働者が、冬季に「ブルーカラー労働者」として出稼ぎが行われているが、ブルーカラー労働の方が技術の修得が易しいから可能なのである。彼らがソウトウェアの世界に出稼ぎに来ることはない。

チャップリンの映画「モダン・タイムス」に代表されるように、ブルーカラー労働者は技術の修得が容易なように、細かく区切られた分担の中で作業をしてきた。修得しなければならぬ知識や技術は限られたものであったし、一旦身に付ければある程度の期間はそのまま使える。もし、変える必要があるときも、短時間の研修（トレーニング）で済む。これがブルーカラー労働者の大きな特長でもある。

だが、一〇〇年続いたブルーカラー労働者の時代も、第三次産業の興隆とともに、先進工業国（？）では大きく後退した。労働の「場」そのものが無くなつてきた以上、避けられない事態である。それに代わつて現れたのが「サービス労働者」であり「知識労働者」である。



新しく知識労働者向けの産業が興つただけでなく、既存の産業にも、職種によって知識労働者であることが強いられる。今まではブルーカラー労働者と、彼らを働かせる監督官しかいなかった工場にも、如何にして不良率を下げ、生産効率を上げるかというのを考える事を仕事とする労働者も現れた。ドラッガーの定義に照らせば、彼らも明らかに知識労働者である。

以下に、ドラッガーの本から知識労働者の特長を抜き書きする。

「知識労働というこの新しい仕事には、ブルーカラー労働者が修得していない能力、しかも修得することが

今月の一言

新聞やテレビのニュースは、そこに割り当てられたスペースや時間の分だけ存在するのであるが、一般にはそのようなことは意識されてはいない。だから、ちょっと大きなニュースが入ってくると、一〇分前までは放送される予定だったニュースが、どこかに吹っ飛んでしまい、まったく報道されないままになってしまふこともある。逆に、大した（？）ニュースがなくても、割り当てられた時間だけニュースは確実に

「事件というものが今日では一種の食物として要求され、その味付けがまだ足りないことを終始不満に思われている。たとえば朝起きて、世界に何か大きな不幸が起つていないと、一種の空虚を感じて、『今日の新聞には何も無い』という（仏）ヴァレリー」

存在するのである。『今日のニュースはこのくらいしかありませんので・・・』といって、予定の時間を半分残して番組を終えたらどうなるか。この場合、報道するに値するかどうかの線をどこで引くかの問題となり、情報操作の危険が大きいとして、おそらく受け入れられないだろう。その一方で、時間の「枠」に収まら

難しい能力が必要である。高等教育による論理的、分析的な知識の修得、およびその適用の能力が必要になる。仕事に対する新しいアプローチと思考方法が必要となる。そして何よりも、継続学習の習慣が必要になる。」

これゆえに農業労働者がソウトウェアの世界に出稼ぎに行けないのである。昨今の企業の事務職の合理化や工場の閉鎖によって仕事を失った人が、かつての農民が工場のブルーカラー労働者として姿を変えたように、知識労働者の枠の中に入れないのである。彼らが知識労働の仕事につくためには、「少なくとも彼らは、基本的な態度、価値、考え方を変えなければならない」のである。したがって容易にはこの「ミスマッチ」は解消しない。



ドラッガーの定義によれば、ソウトウェアの開発に携わるエンジニアと呼ばれる人たちは、間違いなく、しかも殆ど例外なく「知識労働者」の

筈である。いや、当事者自身もそのように定義しているだろう。だが、果たしてどれだけのエンジニアが「継続学習」をしているだろうか。「仕事に対するアプローチ」をどれだけ変えただろうか。そして今も変え続けるための継続学習が為されているだろうか。

ドラッガーが知識労働者の定義に「継続学習の習慣」を含めたのは、「知識」はそれ自身短期間で陳腐化する性質を持っているからである。同じ知識や技法は何時までも通用しない。ソウトウェアの世界もまったく例外ではない。ある程度豊富な知識や技法を持っているのならまだしも、入社時の簡単な研修で、何でもいから動くプログラマーを書けぱいというだけの研修を受けただけで、継続学習の習慣もなくソウトウェア開発に従事しているエンジニアは沢山いるのではない。果たして、ソウトウェア産業の「ブルーカラー労働者」になつていないだろうか。

ないということ、報道関係者の方で勝手にこの「線」を引いていることに、視聴者は気付いていない。CNNは二四時間ニュースを流すことで、放送時間の「枠」を低くし、「見る／見ない」の判断のボールを視聴者の方に投げた。だがそれでも「線引き」は行われている。ただ、今日のように事件の報道が溢れている中に居続けた結果、大きなニュースがないと落ち着かなくなっている。我々は、どうやら大きなニュースがあることで、「安定」している節すら伺える。